

# サハリン先住民族「ニブフ」の伝統芸能アンサンブル「イフ・ミフ・ニブゲン」ポルト公演についての報告

著者	鈴木 しおり, 宮永 敏明, 永留 淳也
雑誌名	北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	4
ページ	181-195
発行年	2004-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00000628/">http://id.nii.ac.jp/1136/00000628/</a>

## サハリン先住民族「ニブフ」の伝統芸能アンサンブル 「イフ・ミフ・ニブグン」ポルト公演についての報告

A Report on Traditional Entertainments “IFU MIFU NIBUGUN” by a NIBUFU Race, Sakhalin  
Aborigines, at a Northern Regions Academic Information Center PORTO

鈴木 しおり      宮 永 敏 明      永 留 淳 也  
Shiori      SUZUKI      Toshiaki MIYANAGA      Junya NAGATOME

### 1. はじめに

学術フロンティア・音楽プロジェクトが2003年度の共同研究企画事業として、ポルト・ホールで行った、サハリン島の先住民族ニブフの公演について報告する。かつてギリヤークとも呼ばれたニブフは、北東アジアに多数分布する少数民族のうち、サハリン島とアムール川河口付近に住む、漁労・狩猟を生業とする民族で、シベリアに最も古くから居住していた人々と考えられている。サハリンにはかつて、大まかに分けて北部のニブフ、中部のウイльта、南部のアイヌのほかエベンキ、ナナイなどの少数民族が共存していた。



サハリン周辺の少数民族居住地域

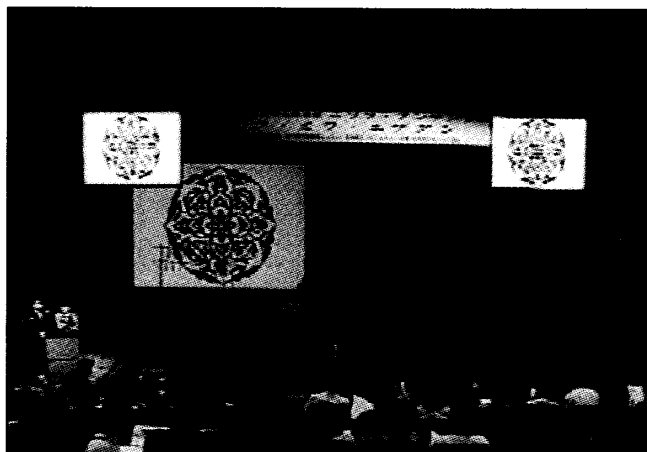
ニブフは現在、州内の少数民族では最多の約2250<sup>1</sup>人が生活しており、伝統的な芸能や儀式などを伝えているが、アイヌ民族との共通点が多々指摘されている。今回は、ニブフが最も多く居住しているという最北部ネクラソフカ村<sup>2</sup>の出身者を中心としたアンサンブルによる公演である。本プロジェクトでは、厳しい自然環境と限られた不安定な資源の中で生き抜いてきた北方先住民族の伝統芸能を通



ネクラソフカ村の位置

して、その世界観・精神世界の一端に触れることで、現代の北方圏に生きる私たちに多くの示唆を与えてくれることを期待した。

公演がたんなるサハリン先住民族の伝統芸能を一般市民に「展示」するだけにとどまらず、本プロジェクト・メンバーがそれぞれの研究テーマで主体的にかかわるため、研究・教育効果を考慮した公演形式として、全体を①本学学生を対象とした「プレ・トーク」②公演形式でアイヌの伝統音楽を取り入れた創作曲の演奏を紹介する第1部③ニブフの伝統芸能を紹介する第2部④客席とニブフ出演者らが交流する第3部－に分けて行った。



開催形式にも配慮したニブフ公演

## 2. 公演内容

### 1) [プレ・トーク]

「プレ・トーク」は午後7時から30分間。場内には本学学生約70人のほか、午後6時30分の開場直後に入場した一般市民にも聴講を制限しなかったため、一般聴衆も少なくなかった。鈴木らによる簡単なあいさつと紹介の後、作曲家で民族音楽に造詣の深い木村雅信氏（札幌大谷短期大学教授）が登場し、「民族音楽の聴きどころ」をテーマに講演した。同氏は、同じ北方圏に住むニブフとアイヌ民族には音楽や意匠など文化的な共通点が多いこと、アイヌの音楽の特徴は「構造」を持たないこと、21世紀の主要テーマである「平等と共生」を確かなものにするためにも、さまざまな民族音楽に触れることが大切であることなどを力説した。この後、木村氏は自身が作曲した「アイヌの子守唄」を札幌大谷短大専攻科1年生の今泉希望さんのソプラノと自らの



鈴木による趣旨説明



「アイヌの子守歌」の演奏

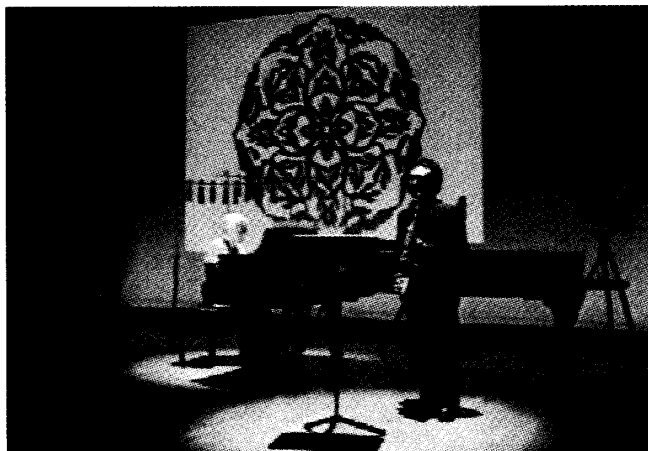
伴奏で披露した。

## 2) [第1部]

第1部では、アイヌの音楽を素材とした曲の演奏が披露された。冒頭、ニブフ・アンサンブルを率いて来道したナジェジダ・ライグン・アレクサンドロブナ団長が登壇して、鈴木・永留と質疑応答を交わした。ライグン団長自身もニブフ出身であり、サハリン州行政府では、少数民族問題を担当する民族政策課長でもある。ライグン団長は、来道したニブフはサハリンでも最も古い民族の一つであり、現在の人口は約2250人であること、今回のメンバーは州内3地区のアンサンブルの混成チームであること、サハリン州には他にもウイльта、オロッコ、ナナイなどの少数民族が居住している<sup>3</sup>ことなどを説明した。

このあと、鈴木が本公演における音楽プロジェクトの趣旨を説明し、「グローバル化が進む中、多様な民族が相互理解を深め、争いのない世界を求めるため、音楽振興が重要なことを肝に銘じて研究に取り組んでいる」と強調した。

第1部では、木村氏がアイヌの旋律を取り入れたり、着想を得て創作した曲を披露した。1曲目の「アイヌの素材による舞曲 第14番 雪の神のユーカラ op.106-9」は木村氏のピアノ独奏。2曲目は今回の公演のために、特に木村氏に作曲を依頼した作品「アイヌのモードによる舞曲 第40番」である。木村氏は委嘱作品の演奏を前に、「(第14番の)『雪の神のユーカラ』は古い作品だが、これを含む1番から39番までは実際のアイヌの音楽を聴いて、取り入れてきた。しかし次の第40番は、そうではない。もう10年以上にわたってずっと、アイヌの“音楽の言葉遣い”が私の体に染み込んでおり、今では自然に湧き出てくるようになっている。第40番は想像の世界、フィクションの民族音楽である」と説明した。曲は永留のサクソフォンと木村氏のピアノ伴奏



「アイヌのモードによる舞曲第40番」の演奏

で披露されたが、一般聴衆の前で演奏されるのはこれが初めてだった。

## 3) [第2部]

第2部の開幕直前に、サハリン州行政府のヴィタリー・ゴミレフスキー・エフゲービッチ副知事<sup>4</sup>（当時）が会場に到着し、ステージで挨拶した。同副知事は、北海道ロシア極東交流事業にもとづいて本公演の翌日に札幌で開催された第8回北海道・サハリン姉妹友好都市代表者会議のサハリン側団長として来道しており、ニブフ・アンサンブルもこの代表団に帯同してきた。ポルトには、同事業の実行委員長で北海道日ロ協会会長の菅野久光氏（元参議院副議長）らも同行した。ゴミレフスキー副知事は、日ロ交流は政府や地方自治体の役人たちだけが進めるのではなく、一般市民がお互いに交流し合うことが大切であること、サハリ

ン州には多くの少数民族が住んでおり、それぞれ独自の文化を保持・発展させていることなどを強調し<sup>5</sup>、本公演が成功裏に終わることを祈った。

ステージ中央奥にはあらかじめ、ニブフの代表的な打楽器「ザス・チャス（またはチャチャハシ）」<sup>6</sup>が配置された。これは、先端をイナウ状にした長さ約2メートルの木の棒3本を組み合



わせ、この2組を支柱にして、長さ約1・5メートル、直径15センチほどの丸太を高さ約1メートルに水平に吊り下げたもので、ニブフの祭事には欠かせない打楽器とされる。ザス・チャスの横木には伝統的な模様がかたどられ、向かって右側の端はクマの頭部らしい彫り込みが施されていた。ステージ向かって左手奥には、鮭の切り身をかたどったボール紙を、高さ約2メートルの横棒に何枚も通してぶら下げたデコレーションが置かれた。公演の途中から、ステージ中央最前部に、単純化した木彫りの頭部が置かれた。

ステージ天井からは中央のメインスクリーンと両サイドの100インチ・ディスプレイ2台を下ろし、プレ・トークや演奏プログラム、登場人物の話の内容などに合わせて、サハリン島と北海道との位置関係やニブフ族の居住地域を図示したほか、サハリン北部の風景の写真を投影したり、ニブフと同じサハリン・アムール河口地域の先住民族であるエベンキ族の切り絵作家の作品や他の作家の版画などを写し出した<sup>7</sup>。切り絵は、両下肢を失いながら非凡な才能を発揮したサハリンの作家シミョーン・ナジェーン・アレクサンドロビッチ（1929－1981年）の作品で、国際先住民年の1993年には、北海道北方博物館交流協会によって財団法人・アイヌ民族博物館で作品展が開かれたため、道民にも知られる存在となっている<sup>8</sup>。ニブフではないが、北方少数民族特有の意匠を含んでおり、ニブフの衣装の装飾やアイヌ文様とも共通するものがあることから、公演を通じて切り換えながら投影した。

会場で配布したプログラムは、日ロ協会から提供されたロシア語版とその日本語訳を参考に、以前にニブフが来道した際に撮影されたビデオ<sup>9</sup>と照合しながら、音楽プロジェクト側の企画を追加して作成した。しかし実際に行われたニブフ・アンサンブルの公演は、用意したプログラムとは順序や内容がかなり違うものだった。プログラム手直しは、現地でのロシア語プログラム印刷後に行われ、さらに当日になって、分かれていた演目を一つにまとめたり、歌と器楽をいくつか追加するなどの変更が行われた。また、公演を来日当夜に設定していたため、小樽での通関手続きに予想外に手間取った影響で、予定していたリハーサルや予備取材をする時間的余裕が全くなかった。さらに札幌滞在のスケジュールがかなり窮屈で、日を改めて話を聞く時間的余裕がなかったことから、公演についての詳細な情報、たとえ

ば各演目の演じられる場面や意味、ニブフ語の歌詞の意味、使われる楽器や用具の名称やいわれ、使用方法など十分な情報が得られなかったことが悔やまれる。

アンサンブル「イフ・ミフ・ニブグン」は、サハリン北部オハ地区<sup>10</sup>のネクラソフカ村のメンバーが主体だった。ライグン団長を除いて、最北端のネクラソフカ村の7人を中心に、かなり南寄りのポロナISK市の3人、中部内陸のチル・ウンヴド村が1人で、ライグン団長の言う「混成チーム」となっている。財団法人・アイヌ民族博物館（白老町）によると、ニブフに限らずサハリンの先住民族の伝統芸能アンサンブルは少なくとも過去4回来道しているが、これまでは、ポロナISK市やノグリキ町在住のメンバーが主体だったという。

以下に各演目の説明を記載する。

- ①「カルニ」 メンバーのうち、ただ1人のチル・ウンヴド村出身者でアンサンブル最年長のアントニーナ・シカルィギナ・ワシリエブナさんが演奏した。カルニはサハリンに自生する高さ2メートル以上になろうかというクマシシウド（セリ科の多年草）の茎を乾燥させて中を抜き、中空として吹き鳴らすもので、ホルンのような重厚な音がする。ニブフの司会は「祭りの開幕を告げるメロディー」と紹介した。アイヌ民族にも、現在では既に伝えられていないが、同様の楽器があったとされる。



「カルニ」の演奏

- ②「パル・イザ<sup>11</sup>」 司会用資料

には「大地の主である『パル・

イザ』に食べ物を与えるニブフの儀式。ニブフは古くからのしきたりを守りながら、新しい土地での繁栄を願い、大地の主『パル・イザ』に祈る」とある。女性たちがシャーマンの口に食べ物を入れると、シャーマンは片手で持っていた太鼓をばちで打ちながら歩き、大地の主に訴える<sup>12</sup>。

シャーマンは腰に、金属製のガラガラがいくつかぶら下がったベルト<sup>13</sup>をしており、太鼓を打ちながらガラガラを鳴らす。シャーマンを演ずるのはアンサンブル長のゾーヤ・リュトヴァさん。



「パル・イザ」の儀式

- ③「あいさつの歌」

- ④「自然の声」 女性3人が、太

鼓を低く連打しながら、風が吹く音や、波の音、カモメや海獣、犬、クマなどの鳴き声を非常に巧みにまねた。風と潮騒は、オホーツク海に面した厳しいサハリン北部の自然をほうふつとさせ、動物たちの鳴き声は、犬を飼い、海辺で鮭鱒や海獣をとり、森では狩をして生活したニブフの暮らしを取り巻く音を再現している。この女性たちだけがポロナISK市在住で、後述の、ばち踊りも同じメンバーで行った。



「自然の声」

- ⑤「ニブフ語の古い歌」 プログラム作成後に追加された歌。

- ⑥「ティグチ」 司会用資料には『ザス・チャス』の伴奏で、クマ祭りの儀式の際に踊られる古い踊り」とある<sup>14</sup>。ザス・チャスの演奏は女性1人。女性4人が両手に木の枝を掲げ、ゆっくりと体をくねらせて優美に踊った。この踊りは観客にも人気があり、第3部では、客席の女性3人が体験を希望してステージ



「ティグチ」

- に登場し、アンサンブル・メンバーと一緒に踊った。
- ⑦「イトイザト・レルド」 女性6人が登場し、はじめは2人が対面して座り、互いに手を打ち合う手遊び。次に立ち上がって、調子を合わせながら肩や顔、ひじ、ひざなどに指で触れていく。司会用資料には「女性の伝統的な遊び。手を打つことで、獣の皮をなめしたり魚を下ろすときに必要な、しなやかで優美な手を保つ効果がある」とされている。日本の「手遊び」は童謡などを歌いながら行うことが多いが、イトイザト・レルドは歌を伴わない。
- ⑧「生活の歌」 この歌も、ロシア語プログラムの印刷後に追加された。司会用資料には「ニブフの集落の歌。そこには、たくさんの犬ぞりを持つ、腕のいい狩人たちが住む。彼らは、自然と調和したその集落で、生涯をすごす」とあり、自然とともに生きるニブフの伝統的な生き方をアピールする狙いがあったと思われるが、残念なことに、この解説はステージで説明されなかった。

- ⑨「カンガとザカンガ」 2種類の口琴の演奏。女性の演奏したカンガは真ちゅう製で、アイヌのムックリ（竹製）のように弁を紐で引っ張るタイプ。男性のザカンガは、やはりアイヌのカニムックリと同じ鉄製で弁を指で弾くタイプ。第3部では、観客の口琴研究者が、持参した鉄製口琴で、ニブフのザカンガと共演した。



「生活の歌」

- ⑩「ティンリン」 弦が1本だけの、演奏法もきわめてユニークな擦弦楽器。司会用資料には「(演奏者の) 喉を共鳴器として響かせる唯一の楽器。ティンリンのメロディーは、息子を失った母親の鳴き声を思わせる<sup>15)</sup>」とある。音はごく小さく聴き取りにくかったが、演奏者は右手で弓を操りながら、左手指で弦を押さえて音程を変化させ、さらに弦に唇を近づけて舌を触れてビブラートをかけるとともに、口琴と同じように口腔を共鳴器として演奏した。この楽器については、本公演に際してサハリン州政府から紹介を受け、本プロジェクトが翻訳した論文「ニブフ風ビオラ ティンリン」(1997年、N. A. マムチェヴァ「サハリン州立博物館年報」第4号掲載)に詳しい記載がある。ティンリンという呼称は、樺太アイヌの楽器「トンコリ」(5弦の撥弦楽器<sup>16)</sup>)と語源が同じとされている。



「カンガとザカンガ」の演奏



「ティンリン」の演奏

- ⑪「ショイグク」 ロシア語プログラムに「偉大な文化の伝承者だったゾーヤ・アグニユ



ン（ショイグク）に捧げる歌」とある。彼女はサハリン北部の間宮海峡に面したラマノフカ村出身で、伝統的な歌や踊りの名手として知られていた<sup>17</sup>。

- ⑫「北の旋律」 これも後から追加された演目で、男性メンバー1人が、シャーマンの太鼓を打ち鳴らしながら、時折、掛け声とジャンプを織り交ぜてステージを駆け巡った。他に伴奏や歌はなかった。

- ⑬「ばち踊り」 ポロナイスクの女性3人が両手にばちを持って、対面や背面の姿勢で互いに打ち合わせたり、床などを打ち鳴らして踊った。ロシア語プログラムには「女性たちが、しなやかさと器用さとすばやい動作を見せる」と説明されている。



- ⑭「花嫁の歌 チスク・ハク」

#### 「ばち踊り」

女性4人が登場。ユーリア・サジゲンさんが結婚する娘に扮し、ひやかす女友達と掛け合いを演じた。司会用資料には「嫁入り支度する娘がいろいろな服を仮縫いしていると、女友達がとてもうらやましがり、彼女をからかう」とある。

- ⑮「獵師たち」 獵師に扮した男性2人が登場し、木の実や小動物などの獲物を探すうちクマに遭遇し、双方とも驚いて逃げるといふ、こっけいな寸劇<sup>18</sup>。

- ⑯「森の野原で」 メンバー総出演で、ニブフの伝統的な遊び、ゲームを披露した。導入部は、森の野原でベリー摘みをしている女性たちを、クマの毛皮をかぶった男が脅し、女たちが逃げた後でベリーを食べていると、別の男が出てきて技比べになり、女性たちも出てきてゲームに加わる—というもの。男性2



#### 「チャフ・タチ」

人が長さ約2メートルの棒で打ち合う「タスキル・ワチ」、男性が切り株の上で両腕だけで体を支え、女性の差し出す水を飲む「チャフ・タチ<sup>19</sup>」、海獣の革でなった長い縄を2人で回し、いろいろな姿勢や跳び方で縄を越える「トイクルディ<sup>20</sup>」など。トイクルディではアンサンブルのメンバーが客席に入り、本学の学生をステージに誘って、一緒に縄跳びをした。

- ⑰「エズムラク」 ザス・チャスの伴奏で、男女4人が2人ずつ、掛け声をかけ、互い

の顔を見ながらペアで踊り、最後は4人で手をつないだ。司会用資料には「若い娘と青年たちが知り合い、気に入った相手を選ぶニブフの遊び」とある。

- ⑱「フィナーレ」 アンサングルのメンバー全員が登場し、全員が鳴り物を打ち鳴らして、客席に友好と繁栄を呼びかけて終わった。



学生も参加した「トイクルディ」

#### 4) [第3部]

第3部は永留の司会で、アンサングルと客席との交流を図った。まず、客席最前列にいた札幌口琴会議主宰のハレ・ダイスケ氏をステージに招き、ニブフの口琴について印象を聞いた。ハレ氏は持参した鉄製口琴と比べて「弁の取り付け角度が違うので、音の響きが違うはず」と答え、ザカンガを演奏したフョードル・ミグンさんとともに



「エズムラク」

即興で共演。永留は「この音楽は全くの即興で生まれた、本当の意味で生の音楽。ニブフの方々とは言葉が通じず、もどかしい思いもしたが、この共演を聴いて、音楽を通じて北方圏に住む者同士が会話できたら、素晴らしいことだと感じた」と聴衆に語りかけた。

口琴は世界中の民族に演奏されている楽器であり、北方圏に広がる諸民族間の文化伝播のカギともいえる楽器である。アイヌのムックリはシベリアからサハリンを経由して伝わったとされ、津軽地方の「口琵琶」との関連も指摘されている<sup>21</sup>。

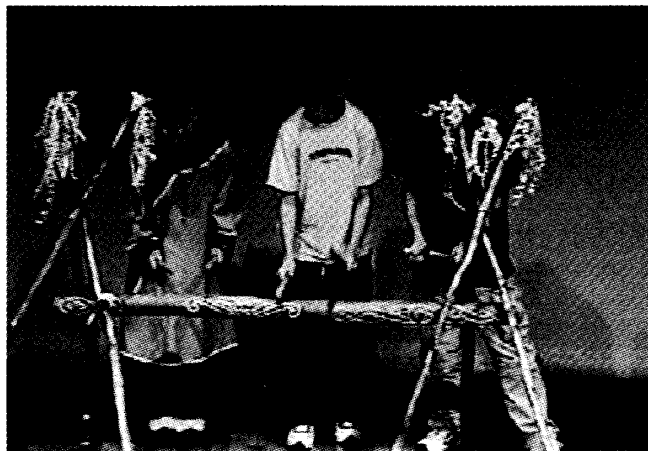
この後、客席にアンサングルへの質問や要望を問いかけたところ、「枝持ち踊りをぜひ一緒に踊りたい」との要望が出て、女性客3人がステージに出て、女性メンバー2人の指導とザス・チャスの伴奏で踊った。また本学の男子学生からは「木



ミグンさんとハレ氏の口琴共演

の棒（ザス・チャス）と太鼓を演奏してみたい」と要望があり、2人がステージに出て、女性メンバーの指導でシャーマンの太鼓をたたいたり、ザス・チャス演奏を体験した。そこへ、ニブフ・アンサンブルのメンバー全員が登場して公演全体が終了した。

閉幕後、ライゲン団長から、「ポルト」と鈴木代表に記念品として、ニブフの伝統芸能である木彫りの細工を施した皿と、ニブフに関する書物「Нн  
вхгг」(邦題「サハリン・アムール  
民族誌 ニブフ族の生活と世界観」E.  
A. クレイノヴィチ著)のロシア語原  
書などが贈呈された。



学生が「ザス・チャス」を体験

### 3. 公演に至る経緯

ポルト・ホールにおけるニブフ・アンサンブル「イフ・ミフ・ニブグン」公演は、長年、サハリンとの交流を続けてきた北海道日本ロシア協会（菅野久光会長）との協力で実現した。同協会は1972年に北海道日ソ親善協会として発足以来、これまで、サハリン州内各地での墓参や慰霊碑・鎮魂碑建立をはじめ、行政・経済・文化など各方面の交流を推進してきた。とりわけ1985年からは、「平和の船」を毎年1－2回運行し、民間レベルでの交流を図っている。この「平和の船」によって、2003年までにサハリンへ合計29回、延べ約3200人の日本人が渡航し、逆にサハリンからも合計15回、述べ約1600人のロシア人が本道の土を踏んだ。そして1996年からは、札幌市とユジノサハリンスク市で交互に「北海道・サハリン州姉妹友好都市代表者会議」を開催してきた。同会議の出席者は「平和の船」で行き来しており、今回のニブフ・アンサンブルも、第7回会議の代表団（団長・ゴミレフスキー副知事）に帯同して「平和の船 マリーナ・ツヴェタエヴァ号」で来道した。

本プロジェクトは、前年の2002年度の共同研究テーマとして、みちのく銀行によるロシア極東地域へのピアノ寄贈事業とロシアの音楽教育の現状調査に取り組み、その成果は「サハリン州への日本企業のピアノ寄贈事業－ロシア極東地域の初等・中等教育における音楽教育－」の論文にまとめ、本学部研究紀要第3号で発表した。これは、プロジェクト責任者



「平和の船 マリーナ・ツヴェタエヴァ号」

の鈴木がピアノ専攻で、かねてから北方圏の音楽教育における民族音楽・楽器の教材化を念頭に置いていたことに加えて、永留も北方少数民族の音楽の調査を進めていたことから、宮永が本道に隣接するロシア極東の音楽情報を収集する手がかりとして設定したテーマだった。この調査の過程で、北海道庁ロシア室および同サハリン事務所とサハリン州政府にも協力を仰いだことから、翌年、サハリン州政府が北海道日ロ協会とともにニブフ公演の「受け皿」を探した際に、道ロシア室サハリン事務所が本プロジェクトとの仲介役を務めてくれた。

日ロ協会はこれまで、いわゆるロシア民謡のアンサンブル公演を主催したことはあるが、先住民族ニブフの伝統芸能公演を手がけた経験はなかった。同協会によると、ニブフ公演はゴミレフスキー副知事から直接、熱心な要請があったという。この背景としては、2004年が国際連合の設定した「世界の先住民族の国際10年」最終年にあたること、ニブフが多く居住しているサハリン北部は、国際石油資本が石油・天然ガス開発を進めている土地でもあることから、州政府にとって先住民族対策をアピールする必要性が生じたのだらうと推測される。

こうして本プロジェクトの企画事業としてスタートしたニブフ公演だったが、サハリン側からの情報が乏しいことが最後までネックとなった。加えて、折から北朝鮮の不審船問題などで税関が日本持ち込み品の検査体制を強化したため、函館税関小樽支所の上陸審査に予想外の時間を要し、アンサンブルの会場到着が遅れて、リハーサルや予備取材の時間が全くとれなかったことが駄目押しになった。

しかし今回のポルトでのニブフ公演は、たんなる興行ではなく民族音楽の解説や客席との交流も行われたうえ、施設や照明、音響も良好で、道日ロ協会は「サハリン州政府側としては、ステージも聴衆も構成も、最も効果的な形でやっていただいたことに、非常に満足していた様子だった」と話している。

## 4. 結 び

北方圏には、本プロジェクトが紹介したニブフに限らず、北欧のサミ、アラスカやカナダのイヌイト、シベリアのヤクート、そして北海道のアイヌなど多くの少数・先住民族（北方民族）が生活している。温暖な地域で進化してきた人類が、寒冷な北方地域に進出できたのは、狩猟技術を身に付けたためといわれる。北方民族は、限りある資源と厳しい自然環境の中で生き抜くために、生きる糧を与えてくれる自然界と良好な関係を保ち、自らもその一部であるという世界観を築き上げた。オゾン層の破壊や温暖化、海洋汚染など地球規模の環境問題にさらされている現代人が、自然と人間とのかかわりを考え直そうとするとき、そして北方圏に居住する私たち自身が「北方圏住民におけるQOL（Quality of Life）の向上に関する総合的研究」を展開しようとするとき、北方民族についての考察を避けて通ることはできないであろう。

そしてサハリンは日本に最も近い外国であり、領土問題を抱えるとはいえ、ロシアは最も身近な隣人である。かつて有力な先住民族だったニブフは、近代に進出してきた日本やロシアに

追われ、さらに現代では大規模な石油・天然ガス開発によって生活環境を脅かされているが、およそ7世紀から13世紀にかけて北海道の東岸まで覆っていたオホーツク文化の担い手だとして、本道との直接的なかかわりを指摘する説もある。現在、サハリンは人口60万人に満たない島だが、豊富なエネルギー資源の開発に欧米諸国から投資と人材が集中している。将来、数次にわたる開発の投資総額は約8兆円、最盛時には数万人の外国人技術者とその家族が暮らすと言われ、その国籍はオイル・メジャーの本拠地である英国、オランダ、米国をはじめ豪州、インドなどでさまざまである<sup>22</sup>。

辺境の島は、世界と北海道、過去と現代の間に浮かぶゲートウエーでもある。

## 付 記

本研究は平成13年度文部科学省の「学術フロンティア推進事業」に基づく「北方圏住民におけるQOL（Quality of Life）の向上に関する総合的研究」の音楽プロジェクト研究費（平成14年度）の助成によるものである。

## 注)

<sup>1</sup> 「イフ・ミフ・ニブグン」団長を務めたナジェジダ・ライグン・サハリン州民族政策課長のステージでの発言。2002年10月9日に実施されたロシア国勢調査の中間速報によると、サハリン州の総人口は54万6481人。ライグン課長の挙げた数字が国勢調査に基づくものかどうかは不明だが、これに基づく州総人口に占めるニブフの割合は0.41%となる。「Sakhalin Region-Resource and Economy」（1994年、Atlas社）の第18図「Population」によると、北方少数民族すべての割合は0.8%（1990年）とされている。

<sup>2</sup> 朝日新聞2001年11月21日付「企画特集『北の中東』第3部 失われしもの②」 「北サハリン石油開発の現場、オハから西へ約40キロ、本島西岸のネクラソフカ村は人口5600人。そのうち1300人が先住・少数民族ニブヒだ」。

<sup>3</sup> 最新の数字は2002年の国勢調査結果の発表を待たねばならないが、朝日新聞2001年11月21日付「企画特集『北の中東』第3部 失われしもの②」には「（サハリン州郷土）博物館によると、州内にはエベンキ（350人）、ウイルタ（150人）、ナナイ（30人）といった先住・少数民族が暮らしているという」。

<sup>4</sup> 「平成14年度サハリンビジネス環境調査報告書」（平成15年、北海道経済産業局）によると、サハリン州には当時、イーゴリ・ファルフトジノフ知事のもとに、第一副知事のイワン・マラホフ（経済担当）を筆頭として9人の副知事がおり、ゴミレフスキー氏は農業担当となっていた。しかし2002年8月20日、ファルフトジノフ知事がヘリコプターの墜落事故で死亡したこと

を受けて、マラホフ氏が新知事に選出されたが、ゴミレフスキー氏は副知事として新体制に残留できなかった。2004年1月の現地報道によると、ゴミレフスキー氏は知事顧問に就任したとのことである。

<sup>5</sup> サハリン州憲章（1996年施行）第12条および第76条に、サハリン州内に居住する北方少数民族の権利と利益を保護するための規定がある。

<sup>6</sup> ニブフ・アンサンプルの持参したロシア語プログラムでは「ザス・チャス」。そのほか、「サハリン・アムール民族誌 ニブフ族の生活と世界観」（1993年、E. A. クレイノヴィチ、法政大学出版会）では「雪の上に斜めに突き刺した二本のモミの若木に、二本の革紐で吊り下げてあるニブフ族の打楽器テヤタン・チハル」。「オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書」（昭和49年3月30日発行、北海道教育委員会）掲載の「ギリヤークの言葉」（米村喜男衛調査員）では「チャチャハシ」。「口琴ジャーナル No.5」（1992年、日本口琴協会）掲載の「サハリン・ニヴフ族の楽器」（A. C. カラソフスキー編、島添貴美子訳）では「チャチャヂあるいはザス・チャシュ」。

<sup>7</sup> 本公演でステージ上のスクリーンに投影したのは、サハリン州政府提供のサハリン州郷土博物館民族学研究論文集（1985年）に掲載されていた作品である。

<sup>8</sup> ほかに国際先住民年協賛特別展「北方民族の詩」図録（1993年、北海道博物館交流協会／財団法人・アイヌ民族博物館）

<sup>9</sup> 「第5回アイヌ民族文化祭」（1993年1月30日、帯広市、北海道ウタリ協会など主催）のビデオ映像記録。

<sup>10</sup> ニブフの一行は公演当日の朝、小樽港に入港したが、上陸に際して函館税関小樽支署から、ステージで使う楽器や小道具類の詳細なリスト提出と実物との照合が求められたため、予想外に時間をとられ、会場に到着したのは開演30分前だった。

<sup>11</sup> サハリンで最初に開発された石油採掘拠点であり、大正末期から昭和初期にかけて、日本も開発に参加し、領事館も置かれていた。

<sup>12</sup> ニブフにはさまざまな神がいるが、ニブフの現状を紹介し旧ソ連の民族政策を糾弾した映画「最終段階にて」（1992年、カザフスタン共和国のソン・シネマ社）解説では「山と森の神プシル・ウィズング」としている。「Northern Peoples 北方民族を知るためのガイド」（1995年、北海道立北方民族博物館）の「北方民族の世界観」では「宇宙像において海と陸とが二つの主要原理になっている例もあります。ニブフのところでは、『主（ぬし）』のなかでも、この二つはことに重要です。（中略）しかし最も重要なのは山と原始林の主（パリス）と海の主（タイナルズ）で、パリスは一番高い山に住み、タイナルズはオホーツク海の底に住んでいます」。また「オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書」の「ギリヤークの言葉」（米村喜男衛調査員）では、高い山を「バリ」、山神は「パラフシン」。

<sup>13</sup> 「口琴ジャーナル No.5」の「サハリン・ニヴフ族の楽器」では「ニブフの太鼓『カス』はアムール川流域のタイプに属する。その枠の厚さは2・5～3・5センチであり、枠の周囲に

は全長にわたって溝が彫られている。魚か犬の皮が張られている。(中略) 蛇や蜘蛛やヒキガエルといった補助精霊の絵が描かれている。その絵は楽器の内側に描かれている」とあり、ばちは「叩く方の端は犬の毛皮でくるまれた…カス・チャス」とされている。また「オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書」の「ギリヤークの言葉」では太鼓は「カシ」で「トナカイの1枚皮を木枠に張」り、ばちは「木の芯を毛皮で巻いた…カシチャシ」。

<sup>14</sup> 「サハリン・アムール民族誌 ニブフ族の生活と世界観」(352-353ページ)では「クァス(太鼓), クァスチャス(太鼓の撥), ヤヌプウ(中空の鉄のガラガラを付けた腰帯)…。…トォグヴス(燻し具)」とある。「口琴ジャーナル No.5」の「サハリン・ニヴフ族の楽器」には「シャマンの衣装一式のなかに、金属製のガラガラがいくつかぶら下げられた幅の広いベルト、ヤンパがある」。

<sup>15</sup> 「サハリン・アムール民族誌 ニブフ族の生活と世界観」(290ページ)に「『死んだ人がいる家では(中略)夜も昼も眠らない。(中略)誰か楽器(トィヌルィン)を奏でられるんなら奏でてやる』とある。

<sup>16</sup> アイヌ文化紹介小冊子「ボン カンピソシ」第7号「芸能」(平成13年, 北海道立アイヌ民族文化センター)には「サハリンや北海道の一部には、弦を指で弾いて演奏する楽器が伝わっています。弦の数がたいてい5本であることから五弦琴と訳されたりしますが、弦が6本や3本のものもある」。

<sup>17</sup> 第5回アイヌ民族文化祭にも参加した。「口琴ジャーナル No.5」掲載の「バーバ・ゾーヤの口琴」(大野兼司NHK記者)に「ニブフ族の伝統的な踊りや歌の名手であるゾーヤ・アグニユンさん(中略)は大陸出身でサハリンに移り住んだとのことで…1935年に結婚」とある。

<sup>18</sup> 1993年に来道したアンサンブルも似たような寸劇を演じたが、猟師が海辺で捕まえたアザラシに逃げられる内容だった。両者の内容や⑩の「自然の音の擬声」、⑫の「ニブフの生活の歌」などによって、漁労と海獣の狩猟や、山林での狩猟、採集を生業としてきたニブフの暮らしが浮き彫りになる。

<sup>19</sup> 「サハリン・アムール民族誌 ニブフ族の生活と世界観」(148ページ)に「次は、<テャフタンド>という競技だった。この競技は短い切り株にしゃがみながら、近くに置いた碗の水を飲むのである」。

<sup>20</sup> 「サハリン・アムール民族誌 ニブフ族の生活と世界観」(148ページ)に「この競技が済んでからトィクアルドが行われた。(中略)二人の少年が双方かなりの距離を置いて立ち、アザラシの革紐の端をあまり強く引っ張らずに掴んで回した。(中略)競技者の目標は跳び上がったとき、手も足も胴体も革紐に触れないようにすることだった」。

<sup>21</sup> 江戸時代後期の文政6年(1823年)ごろ、江戸を中心に鉄製口琴「びやぼん」が大流行したとされる。当時、いわゆる「山丹交易」が活発だったこともあって江戸幕府は北方への関心を強め、間宮林蔵がサハリンを島であると確認したのが1809年、これに基づいて「東韃地方紀行」を著したのは1811年で、口琴流行の直前だった。

---

<sup>22</sup> サハリンのエネルギー資源埋蔵量は石油が230億バレル、天然ガスが2兆5000億m<sup>3</sup>と推定され、開発事業は9つの鉱区に分かれている。既に稼働中の「サハリン2」はロイヤル・ダッチ・シェル（本部はイギリスとオランダ）、三菱商事、三井物産が開発主体で、このプロジェクトだけで投資総額は100億ドルに達する。続く「サハリン1」はエクソン・モービル（同アメリカ）などが主体で、投資総額は約140億ドル。サハリン開発の隆盛を見越して、オランダKLM航空が1997年からアムステルダム－千歳－名古屋線を運行させたが、米国同時多発テロ事件で不振となり、2002年2月から運航を休止している。